

私は戦地で実際に銃を持ち戦う少年兵の話を、数か月前にイラク戦争が起きたときから特によく聞くようになった。

この本もそんな少年兵が登場する。

事件はトム最愛の弟、フィギスの異変から始まった。トムはフィギスのことが大好きだったのも心配だった。どこが異変だったかというところ、フィギスは夜中急にアラブ語で独り言なんて始めたのだ。そう、フィギスは実際にイラクの戦地にいる少年兵と、人格が入れ変わってしまったのだ。

フィギスの体をした少年兵のラティーフは、アメリカ軍を殺すことで頭がいっぱいだ。私と年も変わらない少年が、誰か人間を殺すことを四六時中考えているなんて、ピンとこない話である。しかしそんな子どもたちが今、世界にあふれているらしい。テレビや新聞での少年兵の報道を見たときにも、あまりにも私たちの現存の生活とかけ離れていて、彼らの苦しみや思いを深く考えることはできなかった。むしろ平和で自由な毎日を通じている私たちが、そんな少年兵の心を感じると

この方が難しいのでは、とも思ってしまった。

戦争という醜い争いで失われた小さな命を憐憫に思う反面、浅はかな考えで彼らの気持ちを理解したふりをしたくないと考えていた私は、ラティーフに感情込め、彼ら少年兵を少しでも理解できるようにとこの本を読み進めた。

ラティーフは落ち着きがなく、いつも緊張した様子であったりに注意を払っている。けれど何故か偉そうで、なのに何故か不気味だ。私はラティーフの気持ちが手に取るようにわかった気がした、敵軍が現れたらどうしようという緊張と、逆にかかかってこい、という自信、そして死に対する不安が一気に彼の外面に出たのだと思う。もし自分がラテ

イーフのように少年兵だったら？

実際人間が戦い、苦しみ、そしてなくなっていくその地に私は立っていられるだろうか。大切な仲間たちがバタバタと倒れていくのを見ていられるだろうか。

私たちは「戦争」についてほんの些細なことしか知らない。テレビを通して眺めている戦地は、お茶を呑みながらでも見ていられる。しかし実際は比べ物にならないくらい恐ろしい場所だろうと思うとぞつとする。

画面に映る兵士たちは平和のために戦っている報道される。けれど戦争が起こって平和になるだろうか。誰かが喜ぶのだろうか。私はそこに何か矛盾したものを感じてな

「弟の戦争」を読んで

★中学生の部

普代中三年 太田 千尋さん

らない。

結局最後、少年兵、ラティーフは同じ少年兵のアクバルやアリーとともにアメリカ軍に殺された。この出来事をトムはどのような感じだろうか。大好きな弟

が仮に人格だけでも戦場の真只中に連れて行かれたのだ。フィギスの人格が戻ったとき、トムは彼にこう言った。

「こんな不公平なことってないだろう！」

お前がこんな目に遭わなきゃならないようなことを何かやったっていうのか？私もトムと同じ考えだったが、なんとフィギスはこう言い返したのだ。

「公平ってなに？」

世界は公平に出来ていないんだよ。アクバルやアリーがこんなとこにいたがっていると思う？」

私はこの言葉に驚き、気づいた。つまり彼が言いたいのは、自分のような平和な暮らしをしている子どもが戦場で戦うことになっても、ちっとも不公平なことではない、ということだろう。なぜなら世界中にはフィギスと同じ年で戦士になっている、アクバルやアリーのような子どもたちがいるのだから。

彼らがいくら敵を憎んでもいたとしても死にたくないのは当たり前。そこから逃げ出して家族と一緒に暮らして、勉強して、おいしいご飯を食べ、自由に暮らしたいと願っているのだ。

日本に生まれたからこそ安全で自由に暮らせるという幸せを、私たちは忘れかけてしまっているような気がする。そして、逆に戦地に生まれた彼らのような小さな命のことを、もっともつと知らなければならぬのだ。

私はこの本を読んだことで、そんな少年兵たちの思いを少しは、ほんの少しだけ理解できた気がする。少なくともテレビで見ていたあの戦争ではなく、本当の戦争を少しだけ見られたような気がする。

これからの私たちは彼ら少年兵たちのために何ができるのか考え、それを実行するべきだと思う。そして自分たちのことだけではなく、もつと別の広い視野まで理解を進めなければならぬのだ。

最後に、今現在も必至に戦っている彼ら少年兵に、私一人ではどうにもならないけれど、きつといつか争いが終わる日が来るよと勇気づけた。そして、戦争の恐ろしさを改めて気づかせてくれたラティーフやその仲間たちへ、感謝の心を込めて、ありがとう。

(千尋さんは現在、久慈高の一年生です)

